

令和7年度（第47回）

# 少年の主張 石川県大会 発表記録集



伝えよう！  
21世紀を生きる  
君たちの熱い  
メッセージを

とき  
令和7年  
8月31日(日)

ところ  
石川県青少年  
総合研修センター

## はじめに

昭和54年国際児童年を記念してはじめられた少年の主張石川県大会も、たくさんの方々に支えられ、今年で47回目を迎えることができました。

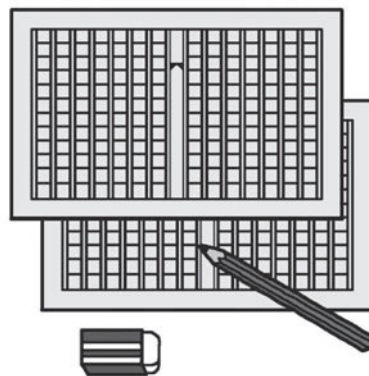
この大会は、中学生が、日常生活の中での体験や考えを自分自身の言葉でまとめ、それを広く発表する機会を提供することにより、中学生世代の社会参加意識の醸成を図るとともに、多くの大人に現代の中学生への理解を深めてもらうことを目的として開催しております。

本大会では、加賀地区、石川中央地区、金沢市地区、能登地区の4地区から選ばれた16名の中学生が、それぞれの体験から真剣に考えたことを力強く発表し、視聴した皆様に大きな感動を与えました。

この記録集は、その16名の主張を取りまとめたものです。一人でも多くの方々に読んでいただき、中学生が日ごろどのように考え生きようとしているのかをご理解いただき、今後の子ども・若者活動推進の一助としてご活用いただければ幸いです。

終わりに、地区大会をはじめ、この大会のためにご尽力いただきました多数の皆様には厚くお礼を申し上げます。

石川県健民運動推進本部



# も く じ

## ◆はじめに

## ◆大会発表作品

### 最優秀賞

時代を紡ぐ民謡の響き

かほく市立高松中学校 3年 山本日菜子 …… 3

### 優 秀 賞

自信という友

石川県立金沢錦丘中学校 3年 越野 愛梨 …… 4

学びを止めるな！

金沢市立長田中学校 3年 瀬川 栞奈 …… 5

### 奨 励 賞

ひとことから生まれる笑顔

川北町立川北中学校 3年 小川 瑠璃 …… 6

誇りある自分へ

かほく市立高松中学校 3年 兼島 秋香 …… 7

あなたのその一言で

七尾市立七尾中学校 1年 稲田 優仁 …… 8

才能に勝るもの

加賀市立山中中学校 2年 竹永 滯 …… 9

コンプレックス

白山市立北辰中学校 3年 鶴田 羽絆 …… 10

努力の天才

七尾市立中島中学校 3年 菊澤 光 …… 11

未来につなげたいー私を変えた子供歌舞伎ー

小松市立丸内中学校 2年 村井美智乃 …… 12

血よりも深い絆

白山市立鶴来中学校 3年 山下 楓花 …… 13

最後の約束

金沢市立野田中学校 3年 田口 愛梨 …… 14

伝えたいこと

七尾市立七尾中学校 3年 野村 虎 …… 15

言葉で心をみつめよう

小松市立松陽中学校 3年 森井 琴子 …… 16

「わたしたち」を言葉にしよう

金沢市立西南部中学校 3年 森田 知音 …… 17

世界を知って、世界と関わる

中能登町立中能登中学校 3年 久井 侑七 …… 18

(優秀賞、奨励賞は石川県中学校一覧の順に掲載)

## ◆審査委員講評 …… 19

石川県教育委員会事務局学校指導課 課参事 廣澤 健吾

## ◆少年の主張石川県大会概要 …… 20

## ◆石川県大会審査基準 …… 21

## ◆地区大会概要 …… 22

## ◆第47回少年の主張全国大会 ～わたしの主張2025～ 内閣総理大臣賞受賞作品 …… 26



「能登の七浦でイナ」これは能登半島に古くから伝わる伝統、能登麦屋節という民謡の一節です。民謡とは世界各地にある、人々の生活の中で生まれ、話し言葉によって歌い継がれてきた歌のことです。私はその民謡の歌い手です。

民謡との出会いは、姉が習っていた民謡教室についていったことです。自然と口ずさむようになった私は、多くの人に歌声を聞いてほしいと願うようになりました。そして、コンクールに参加する機会にも恵まれ、よい結果を残したいと考えるようになりました。

そうして日々の練習に熱が入っていきましたが、どうしても優勝できないのです。「なぜ認めてもらえないの。」と次第に自信を失っていきました。民謡を続ける意味なんてないと思ったのです。

そこで、私は母に打ち明けました。「民謡辞めたい。」すると、「あなたが本当にしたいことは何？自分で決めるんだよ。」と母は言葉を返してくれたのです。「私は、コンクールで結果を残せないことを理由に民謡を諦めようとしているけれど、そもそも私にとって民謡とは一体何なのか…。」私は必死に考えましたが、答えがみつかりません。

ついに私は師匠に尋ねました。「民謡とは何ですか。」すると、「歌われている土地の風土や文化を歌を通して紡いでいくことだよ。」と教えてくださいました。そこで、ようやく私は気がついたのです。私がこれまで歌ってきたことは、人と人との繋がりだということに。石川はもちろん、富山、滋賀…様々な地域のコンクールに出場し、その度にその土地に根付く民謡を学び、歌ってきました。豊漁の祈り…労働への励まし…神仏への感謝…それは、それぞれの土地の今をつくってきた先人たちを敬うことであり、平和な今をもたらしてくれていることへの感謝を表現することにほかならなかったのです。そして、平穏が未来永劫にわたるよう、若い世代に伝

承することに大きな価値があるのだと実感することができました。歌い継がれてきた言の葉に、その土地で暮らしていた人々の生き様を感じながら表現することこそ民謡の本当の価値があります。歌い手と聴き手が繋がることで、過去に生きた人と現在を生きる人とを紡ぐのが民謡という伝統の価値なのです。

皆さんの周りにも伝統はあると思います。芸能や文化というと敷居が高い印象が伴いますが、昔からその土地に受け継がれている特徴、魅力があるはずです。皆さんは、皆さんの方法で伝統を次の世代へと引き継いでほしいと願います。

これからも私は民謡を歌い紡いでいきます。日本中の民謡と出会い、学び、感じ、表現したいです。そのためにも、私は日々の練習に心をこめて向き合います。そして、聴いてくださる方も自分自身も心が動く民謡の歌い手でありたいです。この夏、私は民謡の全国大会に出場します。そこで、私は民謡の魅力を表現し、全国の皆さんの心と心が繋がる架け橋を担いたいです。



ステージの上。そのとき、横には肩を震わせて泣く同い年の少女がいました。私の手には大きなトロフィー。彼女の手には小さな楯。一生懸命に声を殺しているその姿から目が離せませんでした。そのときの私は、まさか彼女が2年後、自分を追いついてしまうなど、微塵も思っていませんでした。

私は、ピアノを習い始めてから2年後の6歳のときに、全国大会に出場しました。周りよりも曲を弾きこなすのが早かった私は「すごいね」「天才だね」と褒められ、ピアノがどんどん好きになりました。「ピアニストになりたい。」七夕の笹に高く結んだ短冊のその一言に多くの希望を抱いていました。ピアニストになってたくさんのお客さんにピアノの良さを知ってほしい。自分がこれから叶えられる可能性を心から信じていました。しかし、小学2年生の夏。2年前と同じコンクールの予選で私は「ミスも少なかった。今年も本選へ行ける気がする。」そう思っていました。人混みをかき分けて見た通過者一覧。そこに私の名前はありませんでした。

何度も、何度も紙を確認しましたが、私の名前があるのは「予選は通過できなかったけど、惜しかった人」に与えられる「奨励賞」の欄でした。

「こんな賞、いらない。」車の中で大泣きしたのを覚えています。それからというもの、私は本選に落ち続けました。

一方、私の横で泣いていたあの子が、全国大会に進出していました。「追い抜かれたんだ。」私は自分の実力が伸びていないこと、予選を通過することすらできなかったことに唖然としました。

私は練習時間を増やしました。平日は2、3時間。休日も3時間以上練習し、小学6年生になるころには平日3時間、休日6時間練習していました。

でも、全国には届かない。彼女の背中を追いかけても、彼女はその2倍のペースで進んでいたのです。そんなある日、「またあの子、全国大会行くて。さすがだね」私がそう呟くと、母が私の顔を不思議そうに覗き込みました。「悔しくないの？」

私は次第に、全国大会に進めないことにも、誰か

に追い抜かれることにも「悔しい」と感じなくなっていました。テレビで「天才少年少女」といわれている人が「毎日8時間練習しています」と言っているのを聞いても「すごいな」の一言で終わってしまう。悔しい、勝ちたい、と思う気持ちが強い人のほうが結果は出ます。次第に感情が薄れていく自分にどんどん嫌気が差しました。

そんな中、国語の授業で「見方を変える」という言葉に出会いました。悔しさを感じないということは、自分の練習方法や考え方に自信があるということかもしれない。そこで一度自分を信じてみることにしました。自分のやりたい練習方法で、自分の演奏を信じて。

そんな私に転機が訪れました。中学1年生のときです。「全国大会に進出したよ！」家に飛び込み教えてくれた母。私は嬉し涙に暮れました。

7年ぶりの全国大会。誰かに合わせるのではなく、自分のやりたい練習をした結果でした。悔しさを感じなくなった自分に失望しながらも、「私ならできる」と。自分の可能性を信じていた、あの頃のように。

結局、私は全国大会で賞を獲得することはできませんでした。一方、彼女はベスト賞です。しかし私は、爽やかな気分になりました。「自信という友」を得て、結果がついてきた事実が、また新たな自信につながったからです。

自分を信じることは大きな原動力になります。自分の才能に自信がなくても、大丈夫。これまでの努力と、なにより自分に自信を持ちましょう。努力が報われなくても、自分を信じ続けましょう。その自信が隣で寄り添う友となって、私に、あなたに、大きな力を与えてくれるから。





私は学ぶことが好きです。私が言う「学ぶこと」とは、テストでいい点を取るため、人に認められるために勉強するという意味ではありません。

日頃から、私の中で「もっと知りたい」という気持ちがあふとした瞬間に生まれるのです。学びとは、経験や学習を通して知識やスキルを習得し、行動や考え方が変化していくことを指します。「なぜ？」と疑問に思ったことを自分なりに調べたり、考えたりすることで少しだけ世界が広がったような気がする。それが嬉しくて私は学ぶことが好きだと感じるので。

「面白そう」「知らなかった」と感じた瞬間から学びは始まっていると思うのです。教科書の中だけでなく、日常の会話や目にするものの中でもどんな場面にも学びは無数に広がっている。私はそう感じながら中学校生活を送ってきました。

生徒会長や運動会の応援団長、委員会の委員長など様々なことに挑戦しました。初めて関わった人、目にしたもの、そこから得た全てが私にとってかけがえのない学びなのです。人前に立つ機会が増えるたびに、やりがいと共にプレッシャーも感じてきました。ですがそれ以上に「この活動はなぜ必要なのか」「どうすればより良くなるだろうか」と考えることが楽しかったのです。

そんな私を見て、冷やかな声を投げかけてくる人もいました。「目立ちたがり」「いい子ぶってる」「内申点稼ぎ」自分が本気で取り組んでいることをそんなふうに見られているのかと、とてもショックを受けました。自分の言動をまた誹謗されるのではないかと不安に駆られ、何もしたくなくなった。何もできなくなった。その時自分の心に問いかけたのです。私はなぜこれをやっているのか、どう在りたいのか。自分の中から返ってきた答えは「知りたい」「学ぶことが楽しいから続けたい」というものでした。誰かの言葉に心を縛られることなく自分の気持ちをごまかさない。そう決めて、私は学び続けることを選びました。こうして、今この場に立っています。

ポケットから取り出したスマホでなんでも調べられ、簡単に答えが得られるようになりました。そんな時代の中で私たちに必要なものは「答え」だけを得るのではなく、「なぜ？」「本当に？」と問い続ける力です。自分の頭で考えて、自分なりの答えを見つける。その過程こそが本当の学びなのではないでしょうか。

私は、「知りたい」という気持ちは人を動かす原動力＝心のエンジンになると信じています。学び続けることで、今まで見たことのない新しい景色と出会える。新しい自分に出会える。そして、私たちの未来は開かれる。ゆえに学びを止めてはならないのです。

私たち中学生は子ども以上大人未満です。子どもだからと甘えるほど幼くもなく、大人になるにはまだ遠い。大人でもなく子どもでもない揺れ動くこの年齢の時期にこそ、自分の心と向き合って自分で考えることが必要なのです。勉強だけではなく、人との関わりの中で感じたこと、考えたことも全て自分の成長に繋がる「学び」だと思うのです。私はその学びの先にある未来を見てみたい。

学ぶことを止めないでよかった。誰かの言葉に負けていたら、今の私はいなかった。だから私は、これからも立ち止まらず学び続けます。私たちは、学び続けることで自分自身を、そして未来を変えることができるのです。そんな自分に会いたくはありませんか。そんな未来を見てみたくはありませんか。それぞれの場所で、それぞれのやり方で、学びを続けてみませんか。

合言葉は「学びを止めるな！」



「会った人には挨拶をしましょう」小学校低学年の頃の私は、会う人会う人に大きな声で挨拶をしていました。「おはようございます！こんにちは！」しかし、学年が上がるにつれて、その声は次第に小さくなっていき、挨拶をする数さえ減っていきました。しなければいけないと思うけれど、大きな声で挨拶するのが恥ずかしい、知らない誰かに急に挨拶したらどう思われるのだろう、そう考えていたからです。

そんな私を変えた出来事が、昨年の夏にありました。私が住む川北町では、ニュージーランドとの国際交流事業を行っています。私は、その一環の「中学生のニュージーランド派遣」に参加し、夏休みの1週間で現地で過ごしました。私は、4歳から英語を学んでいます。そのため、初めての海外を楽しみにしていました。

最初の大きなプログラムはホームステイでした。それまで一緒にいた友達や先生方とは一度別れて、3日間をホストファミリーと過ごします。一人になると思うと不安で、迎えを待つ間はとても緊張していました。「どんな人が来るのかな」友達とそう話していた時です。待機していた場所にホストマザーの女性が入ってきました。

「Hi!」彼女は私たちの先生に挨拶し、緊張している私とは正反対の明るい声でにこやかに話し始めました。初めて対面し、何か言わなければと必死に絞り出したのは「Hello. Nice to meet you.」英語を学んでいて何度も言ってきた決まり文句のような一言挨拶でした。それでも「Nice to meet you, too.」と返してくれたときは、私の曇っていた気持ちが晴れていくのがわかりました。

この3日間で多くの体験をしましたが、一番印象に残っているのが、彼女の明るい姿です。お店でお手伝いをしていると、彼女はお客さん一人一人に「Hello」「Hi」と声をかけ「How are you?」と会話を始めるのです。お客さんも驚く様子さえなく会話を続けます。それを見た私は、なぜ知らない人に明るく声をかけ、お互い笑顔で会話ができるのか

不思議に思いました。日本ではあまり見ない光景。しかしそれは、私が見てきた中で1番と言っているほど平和な世界でした。「今までできなかった挨拶がここでならできるかもしれない」私は勇気を出してお客さんに声をかけてみました。すると相手の人は笑顔になり挨拶のあと、さらに私の着ていた服をNiceと褒めてくれたのです。嬉しくなった私は最大限の笑顔で分かる単語を使ってどうにか会話を続けました。「たった一言の挨拶が、人と人を繋げてくれる、そして笑顔にしてくれる。」あいさつは素晴らしいと心が温まりました。

この出来事は私に大きな勇気を与えてくれ、ホストマザーといるときはもちろん、そして彼女と別れたあとでも、現地で出会った人々に自分から挨拶できるようになりました。異国の地で初めて会った人と話し、笑顔になれた経験は私の一生の宝物です。

こんな素晴らしい経験をここで終わらせるわけにはいきません。私は、日本に帰ってきてからも自分から会った人に挨拶することを心がけました。

私が通う中学校の隣には小学校があり、毎朝校長先生が玄関に立って子どもたちを迎えていらっしゃいます。その先生に挨拶をする中学生は正直多くありませんが、私は小学生に負けてはいられないと、その校長先生に挨拶をし始めました。それからしばらくしたある日、校長先生が私に声をかけてくださいました。「いつも挨拶が素晴らしい！なんてお名前？」それ以降、校長先生は「小川さんおはよう！」と笑顔で手を振ってくださるようになりました。また挨拶で繋がれる人ができたと、とても嬉しかったです。

挨拶が誰かと繋がるきっかけになる。そして笑顔が生まれる。それはニュージーランドでも日本でも同じことでした。勇気があることだけれど、誰かと関わることで得られるものはたくさんあるはずです。これから多くの人と出会う中で、挨拶と会話を大切に、誰かと笑っていただけること。それが私の人生の目標です。



2年前の私なら、今の私に「やめておきなよ。」と、呟くに違いありません。「私にできるはずがない。」と挑戦することが怖くて仕方なかったのですから。

幼い頃から自分に自信がもてず、引っ込み思案な性格でした。失敗して、先生に叱られることが怖くて、様々な機会から逃げてばかりいました。中学生になると、拍車がかかり、「恥ずかしい思いをするくらいなら、見て見ぬふりをすればいい。」とまで考えるようになっていったのです。

中学1年生の英語の授業中、「黒板に教科書の問題の答えを書きにきてくれる人はいませんか。」という先生の問いかけにクラスの誰もが手を挙げられませんでした。その様子を見て、先生は「失敗してもいい。挑戦することに意味があるんだよ。」と叱ってくださいました。正直、私は半信半疑でした。「挑戦することに意味があるだなんて綺麗ごとだ。」と自分を正当化しようとしていたのです。それでも私は、叱られないために授業で発言をするように努めました。声が震えてばかりでしたが、すらすらと人前で話す友達の姿を意識して見るようになると、私も自分の考えを堂々と語れるようになりたいと思うようになっていったのです。

そうして自分の変化を実感しだした2年生の時。おぼろげだった夢が明確な目標に変わりました。それは、学校の先生になることです。人前で思いを語る経験が未来の自分を想像することに繋がったのです。そして、大切な未来を見据えて、今の行動をよりよくしていきたいと考えるようになりました。

3年生になった私は、毎日を楽しみながら過ごしています。初めての学級代表も務めています。「見通しがもてなくて怖い。」そのように未来に不安を抱く自分は、確かに自分の中にいます。一方で、「楽しそうだから挑戦してみたい。」と強くありたい自分が背中を強く押してくれます。「成功の反対は失

敗ではない。何もしないことである。」たくさんの弱い自分とも出会いながら、小さなことでも行動を起こそうとしてきたことが、未来の誇れる自分への道標になっています。

この夏、私は新しい挑戦をします。それは、合唱コンクールのリーダーになることです。私が先生になるために必要な経験だと思い、立候補を決めました。想定外のことが起きたり、仲間と意見が合わなかったりもするでしょうが、「成長するためのステップだ。」と楽しんで立ち向かっていきます。そして、仲間のために、行動できる自分でありたいです。

皆さんは、今の自分を誇りに思えますか。私たち一人一人が自分自身を誇りに思えることは異なるでしょうが、自分を誇る思い自体は私たちが人生を楽しく生きる上で必要なことだと思います。私にとっては、挑戦することが誇れる私らしさを実感できる手段でした。楽しいから挑戦するのではなく、挑戦するから楽しいのです。皆さんも今日から、新たな挑戦をしてみてください。そうすれば、あなたが誇れるあなたときっと出会えることでしょう。私が誇れる私と出会えたように。





皆さんに質問です。皆さんにとって、「言葉」とはなんですか？ だいたいの方は、考えたことがないのではないのでしょうか。僕も最初は、考えたことがありませんでした。でも今は、会話するときに使うものでもあり、人をいやな気持ちにさせたり、逆に人を安心させたり、たった一言で人生を変えてしまうすごい力をもったものだと思います。今から僕がそう思うようになった出来事を話します。

僕は、「手掌多汗症」という病気をもっています。「手掌多汗症」とは、手に大量の汗をかく病気です。そのため、テストのときに手汗で紙が破れることがあります。だから、このように今も手汗をふくタオルをもっています。5歳から64歳の人を対象にした調査では、493万人が発症しています。つまり、20人に1人の割合です。多いと思いませんか。僕は、小学2年生のときにこう言われました。「優仁、手汗汚いから近づかん」といて。「配り物、手汗でぬれるし、配らんといて。」僕は、この言葉がきっかけで学校に行くことや、人と関わるのがいやになりました。そして、だんだん友達の言葉がエスカレートしていきました。我慢できなくなり、泣きながら親に今まであったことを話しました。すると、父と母がこう言ってくれました。「そんなこと気にしないでいい。」「ありのままの自分を受け入れてもらえるように努力しなさい。」この言葉のおかげで少しずつ友達とかかわれるようになってきました。「手掌多汗症」ということを隠していたけれど、ある日友達に思いきって話してみました。すると、少しずつ普通に接してくれるようになりました。僕は、「普通」ということがとてもうれしかったです。

そして、今年の4月から中学生になり、知らない人たちも増えて、また、小学校のときみたいにさけられたり、悪口を言われたりするのではないかと、とても心配でした。だから、小学校のときのように、ある友達に「手掌多汗症」ということを話してみま

した。すると、「人と違うのって、普通でしょ。」僕は、この言葉にはっとしました。人はみんな違うからそのままの自分でいいのだと安心しました。

僕は、この出来事があってから、「言葉」には人をいやな気持ちにさせたり、逆に安心させたり、たった一言で人生を変えてしまうすごい力をもったものと分かりました。小学校の頃、いじめについての全校集会で先生が人の心を紙にたとえて話をしてくださいました。「紙は、1回ぐちゃぐちゃになってしまうと、どれだけきれいに戻そうとしても、新しい紙にしないかぎり元には戻りません。これは、人の心と同じで、悪口を言われたりいじめられたりすると、立ち直れたように見えても心の傷は絶対に消えない。」とおっしゃっていました。僕は、この言葉から、「人の心って薄っぺらい紙といっしょだな。」と思いました。

これらの経験から、人はたった一言で人生が大きく変わってしまうと分かっていたのに、自分が思う「普通」と違う人に対して、自分も悪口を言ってしまうことに、今はものすごく反省しています。これからは、言葉の力と、人と違うのが普通ということを念頭に置いて相手を尊重して生活していきたいです。皆さんも毎日使っている「言葉」一つ一つ振り返ってみてください。あなたのその一言で人の人生が大きく変わるかもしれません。

今、僕は、たとえ自分の心の紙が、元のきれいな紙に戻れなくても、破れなかったことに感謝して、ありのままの心の紙で生活していきたいです。



「次々に実績を残していく君には、才能があるよ。」

私はこの言葉を聞いたとき、うれしい、というより、悲しい気持ちになりました。なぜでしょう。私は、その理由をすぐに解明することができませんでした。

私は、美術部に所属しています。これまで、いくつかの応募作品に挑戦してきました。その中で、私はある賞を受賞することができました。そのことを知った家族が、私に言った言葉、それが、冒頭のセリフでした。

一見すると、最高の褒め言葉です。だけど、私にはそうは聞こえませんでした。それは、「才能」という言葉に原因があるのではないかと考えたのは、その言葉を言われてから1週間ほど経った頃でした。

才能。それは、「生まれつきの能力」を意味する言葉です。私はよく絵を描きますが、いろんな人から「上手だね」と言ってもらえます。でも、私自身は、それは才能があるからだとは思っていません。私が絵を描くのが得意なのは、たくさん練習してきたからです。伝統工芸品・人体・建物・動物など、ジャンルを問わず、絵の具や色鉛筆など、いろんな道具を使って、多いときには1日6時間、ひたすら絵を描いてきました。こうした日々の積み重ね、つまり、「努力」によって、私は絵を描くことが得意になったと思っています。

だからこそ、受賞したことに対して、目には見えない「才能」という一言でまとめられてしまったことに違和感を覚えてしまったのです。私が得た結果は、決して「才能」によるものではない、「努力」によるものなんだ、という思いが、私の心のもやもやの原因だったのです。

それと同時に、私はこうも考えました。「なぜこれほどまで努力をしているのだろう」と。しかし、この答えを見つけることは難しくありませんでした。

た。私が努力をする理由、それは、「好きだから」の一言に尽きます。よくアニメ番組で、弱小だったチームが強豪校に勝利を収める、という場面があります。それを達成できるのは、主人公をはじめとした登場人物が、例えば、野球のアニメであれば野球が好きだという気持ちをもっているからではないでしょうか。私の場合、それが絵を描くことだったということにすぎないのです。

「努力に勝る才能はない」という言葉があります。確かに、努力を重ねることで、才能のある人を上回ることがあるかもしれません。しかし、私は、それ以上に、そのことを「好きだ」という思いをもつことが、何より大切なのではないかと思います。「好きだ」という思いが、人を知らず知らずのうちに努力の世界へと誘い、「才能」と呼ばれる、超えられないような壁を超えることを可能にするのではないのでしょうか。

「才能がある」という言葉は、最大級の褒め言葉かもしれません。しかし、私はその才能に勝る「好きだ」という気持ちを、これからも大切にしていきたいです。

私には、夢があります。それは、全身に絵の具を塗り付けて、学校の校舎くらいの大きさの板に、壮大な宇宙の絵を描くことです。そして、誰にも見せることなく、自分ひとりですっとその絵を眺め、「絵を描くことが好きだ」という気持ちを思う存分噛みしめていきたいです。夢に向かって、これからも絵を描き続けていきます。



みなさんには「コンプレックス」があるだろうか。私は、小さい頃から「吃音」というコンプレックスを抱えている。吃音とは、話すときに言葉が詰まったり、引きのばしたり、同じ言葉を繰り返したりする発達障害だ。

私が吃音を意識し始めたのは、小学3年生の時。グループになり、一人一人がみんなの前で発表するという授業だった。私もみんなのように発表しようとしたが、突然言葉が出なくなった。初めは、たまたまだと思っていたが、その日からスムーズに話すことができなくなった。吃音が原因で嫌な思いをしたことはたくさんある。例えば、自己紹介のとき。みんなが、スラスラと自己紹介している姿を見て焦っていた。私は、心の中でずっと練習し、ついに順番が回ってきた。でもやっぱり言葉が出ず、無言の空間が続く。本当にこの空間が嫌いだ。早く言わないといけないうのは分かっているのに、言葉が出ない。みんなが、当たり前のようにしていることが私には、吃音を抱えている人にとっては当たり前ではない。それが、どれだけ苦しくて辛いものか。毎日のように他の人と比べ、うらやましいと思っている自分も嫌いだった。1番辛かったのは、誰かにバカにされるということだ。これは、本当に悲しかった。私だって好きで吃音症に生まれたわけじゃない。それなのになんで、バカにされなきゃいけないのか。周りの人と自分が少しでも違うだけで、注目され、バカにされて笑われるのを繰り返す。だから、発表からも逃げていたし、学校にも行きたくなかった。でも、私は誰かと話すことがとても好きだ。友だちと一緒に話しているときは、吃音のことを忘れて笑い合えるのが好き。だけど、やっぱり誰かと話すのは怖かった。好きなことまで奪われてしまうのが悲しかったし、辛かった。いつも「みんなと同じように話したい。堂々と自信をもって発表できるようになりたい。」などばかりを考えてしまう。叶うことはないと分かっているのに、気付いたら考えてしまっている。両親や友達にも相談することができなかった。相談したときの周りの反応が怖かったから。特別扱いや心配をされたくなかった。でも、我慢の限

界がきて、私は6年生のとき担任の先生に初めて相談をした。勇気をふりしぼり今まで思っていたこと、溜めていたことを全部話した。受け止めてくれないかもしれない。先生を困らせてしまったらどうしようという気持ちで、私の頭はパンパンだった。でも、先生は「なんで自分の個性を恥ずかしいと思う？羽絆には羽絆だけの良さがある。そんなことを気にせずに前だけ見て進んでほしい。」と言ってくれた。この言葉を聞いて私は、涙があふれそうになった。「ようやく自分の気持ちを言えた。受け入れてくれる人がいたんだ。」という安心感があつたからだと思う。今まで発表から逃げていた私が成長できたのは、この言葉があつたからだ。この先生とこの言葉に出会えていなかったら、私は今までと同じように逃げ続けていたと思う。だから、先生には感謝しきれない。どれだけ苦しいことや辛いことがあっても、近くで支えて寄り添ってくれる人は必ずいると実感できた。もし、誰もいなかったら、私達は今を生きていないと思う。だから、いろんな人と協力したり助け合ったりして、関係を深めることが信頼につながるのだと思った。

このように、障害をもっていると苦しい思いや辛い思いをすることがたくさんあると思う。でも、障害のせいで自分の好きなことをやめたり、自分のことを嫌いになったりしないでほしい。障害をコンプレックスだけだと思わないでほしい。もし、どれだけしんどくても自分一人で溜め込む必要はない。誰かに相談したら、絶対支えてくれる人、寄り添ってくれる人はいる。今でも「吃音」は私のコンプレックスだ。一生このコンプレックスは消えないし、付き合っていくしかない。でも、辛いことばかりではない。楽しいことや幸せに思えることが、これからたくさん出てくると思う。だから「障害」にずっと縛り付けられずに自分のペースで頑張っていってほしいと思う。私も、このような経験があつたからこそ自分を知り、周囲の人の優しさに気づき、そして大きく成長することができた。これから先も、みんなと助け合いながら過ごしていきたい。



「天才」とはどのような人をいうのでしょうか。才能がある人？社会から認められている人？私は、努力ができる人だと思います。そう思ったきっかけは、昨年の9月、初めて挑んだクラリネットのソロコンテストです。そこで、私は、ある「天才」と出会いました。

コンテストの本番当日、私は納得のいく演奏ができず、自信がないまま、初めて今日戦う相手の演奏を聴きました。その子は演奏者と審査員の冷たく鋭い視線の中、演奏を始めました。「天才だ。」これが最初の印象です。難しい連符やパッセージは苦しいはずなのにそれを感じさせない演奏で、自分が1番だと言わんばかりの表情だったからです。この時私は、演奏に感動するとともに、初めから持っている才能に勝つなんて絶対に無理だと感じました。しかし、この思いはすぐにかき消されます。その子の楽譜を見ると連符はどのように練習をしたら上達するのか、このフレーズは審査員にどのように感じてほしいのかなど、楽譜が真っ黒になるくらいに書き込んでありました。この楽譜からその子と私との決定的な違いに気付きました。それは、「努力」です。目標達成に向けて時間をかけて力を尽くす、皆さんが知っているような努力は私もできていたと思います。しかし、私の努力は、ただ曲を繰り返し練習するだけでした。一方その子は良い演奏に近づけるためにどのような方法の努力が必要なのか、目的を定め、目標に達するまでの過程を考える意味のある努力をしていました。

プロ野球選手である大谷翔平もその子と同じような努力をしています。それは、目標達成シートという中心に大きな目標を置き、周辺に達成に必要な要素を八つに分解し、それぞれをさらに具体的な行動に細分化して整理するものを活用していることです。大谷翔平はこのシートを高校1年生の時に作成し、今やるべきことを可視化して日々の練習に励み

ました。このような努力した大谷翔平は今では世界を驚かせる野球選手になっています。

私は最初、才能はもともと持っているものだと思っていました。しかし、コンテストで出会った「天才」や日本や世界に名を残している「天才」は、必ず努力をしています。

今、秋にあるクラリネットのソロコンテストに向け、練習に取り組んでいます。今年は、審査員の心に響く、自分にしか奏でることのできない音色で演奏をするという目標を掲げました。何が足りないのか、何を心がけるべきか、何をどのようにするべきなのかを自分の頭で考え、目標に向かって努力を組み立てる「努力の天才」に私はなります。



## 未来につなげたい ―私を変えた子供歌舞伎―

小松市立丸内中学校 2年 村井 美智乃



伝統は、守らなければならないものでしょうか。私は、少し違うと思っています。

私の住む小松市では子供歌舞伎の伝統を大切にしています。私は4歳から日本舞踊を始め、歌舞伎の舞台を見ることも多くありました。もともと引っ込み思案な私ですが、役者のセリフを真似するのは楽しくて、気づいたら歌舞伎の世界に入っていました。

今まで15回ほどの舞台に立ってきた中で、私が特に真剣に向き合った役があります。それは勧進帳の弁慶です。公演の舞台は、なんと東京の浅草。浅草での初めての上演は私にとっても小松市にとっても大きな大きな挑戦でした。この役をもらったときは、東京の人やたくさんの外国人観光客に、小松が誇る勧進帳の魅力を伝えることができるのか、不安でいっぱいでした。そのうえ弁慶という役は膨大なセリフに加え、怒ったり泣いたり感情表現が難しい役です。師匠に動きを何度教わっても、なかなか身につけることができません。私には務まらないのではないかと。焦りと申し訳なさがかみ上げ、演技をしていますが、恥ずかしさが消えませんでした。

そんなとき、師匠があることを教えてくださいました。

「舞台上がるときは感謝の気持ちを忘れずに。礼儀正しく歌舞伎ができれば絶対に良い舞台になるよ。」

その言葉で気づきました。私たちが舞台上で活躍できるように、たくさんの方が準備をし、応援してくれていることに。私一人で演じているわけではないのです。みんなで作る舞台なのだから、恥ずかしがってはられない。そう強く思いました。

本番当日。「弁慶かっこいい。がんばってね。」という声援とともに、たくさんの方が拍手で迎えてくれました。緊迫感のある問答をやり切り、最後は役者と観客との一体感を感じられるほどの盛り上がりでした。きっと、師匠が言っていた、「礼儀正しい歌舞伎」ができたのだと思います。浅草の地で弁慶の役を演じることができて、本当によかったと感じた瞬間でした。

控えめで自分の思いを素直に伝えることのできなかった私が、歌舞伎を通して、たくさんの大人やお客さんと関わることで、もっといろんな人と交流し、自分の思いを伝えたいと思うようになりました。人前で話すことが大好きになったのです。私を明るく変えてくれた歌舞伎に、感謝しています。自分が支えてもらったように、今度は支える側になりたい。そんな思いから、今年の子供歌舞伎では後見を務めました。スポットライトを浴びていなくても、大好きな子供歌舞伎に関われていると思うととてもうれしかったです。

私が思う歌舞伎の魅力は、役者やスタッフ全員が、お客さんを楽しませたい、感動させたいという同じ目標をもって一緒に舞台をつくり上げていくことです。伝統を守ることは、複雑な技術を身につけることだけではありません。私のように、純粋に歌舞伎を好きになって、私の姿にあこがれてくれた後輩が、また歌舞伎をつないでいく。それが、子供歌舞伎が250年続いている理由なのだと思います。伝統は守らなければならないものではなく、みんなにとって「守りたいもの」なのではないでしょうか。

私はこれから日本舞踊の稽古を続け、さらに英語を学び、留学先などで自分の舞踊を披露したり、歌舞伎について英語で紹介したりしたいという夢を持っています。そして海外の人に小松の子供歌舞伎をぜひ見に来てほしいです。そうすることが、私を変えてくれた子供歌舞伎への恩返しになると信じています。歌舞伎を、未来へつなげていきます。



私には10歳年下の弟と、14歳年下の妹がいます。5歳の弟はとても元気でゲームが大好きです。妹はまだ1歳で体も小さいですが、よく食べるしいつもニコニコしています。でも、この二人と私は、お父さんが違います。いわゆる「異父兄弟」です。今回、主張大会に参加するにあたり私は、初めて自分の家族について真剣に考え、みなさんに2つのことをお話ししたいと思います。

私は、小さいころから小学校3年生まで母子家庭で育ちました。それから、母が再婚し、今のお父さんと一緒に暮らすようになりました。母が妊娠し、弟が出来ることに、私は単純にうれしかったこと覚えています。みなさんは、一般的に「異父兄弟」と聞くとどんなことを考えますか。友達にきいてみると、「ややこしそう」「家族なのにぎこちないんじゃない?」「気になるけど、複雑そうで聞きにくい」という意見がありました。当たり前ですが、私たち姉弟は喧嘩をすることもあります。でも、二人ともかわいくて一緒にいてもみんな違う表現や行動をするので毎日が楽しいです。みなさんにとって家族とは何ですか。「血のつながりがあるから家族」と考える人がいるかもしれませんが、でも、私はただが家族の条件だとは思いません。そもそも「家族」の定義は時代によって変化します。電通の調査によると、同性パートナーなどのLGBTQという言葉の認知度は、2015年は37.6パーセントでしたが、現在では80.1パーセントまで浸透しているそうです。また、2023年における日本国内の婚姻件数は47万4,741件で、厚生労働省の「人口動態調査」の結果では、そのうち再婚は4件に1件、つまり約12万件が再婚だと言われています。私たちのように「血のつながりがない家族」が他にもある、ということが調べていくうちにわかりました。

私が、一つ目に言いたいことは、異父兄弟についての偏見や誤解をしてほしくないということです。親が違っていても、家族として生活できるし、普通の家族と何も変わりません。変に気を遣ったり、「特別扱い」したりしないでください。「父親が違う =

本当の家族じゃない」という考え方はもう古いと思います。血がつながっていないから、という理由で人との関係が決まるなら、友達も先生も近所の人も良い関係でつながることなどできません。しかし、実際に血がつながってなくても人と人はつながれるし、助け合いも話し合いもできます。今、家族のことで不安を抱えている人は一度考えてみてほしいです。「今の家族のことは大切ですか。」この質問に「はい」と答えることができるのであればその家族はなんの問題もないと思います。

二つ目に私が言いたいことは、自分を育ててくれる人に感謝するということです。近年、家庭内での悲惨な事件が多く大切なものを奪ったり奪われたりするニュースをよく耳にします。せつかくの家族をもっと大切にできるようにお互いに良さを認め合えるような家庭環境をつくらなければいけません。私は、どちらかと言えば思ったことをすぐに言ってしまうし、おせっかいな性格だと思います。こんな私ですが、お父さんやお母さんは私を見放さず、温かく見守ってくれています。私が日々明るく生活できているのは、家族のおかげです。そして、私にとってこれが当たり前であることがどれだけ幸せなことか、ということを最近身に染みて感じるようになりました。こうしてみなさんに私の家族の話ができることも家族との絆があるからだと思います。血のつながりよりも、心のつながりの方がずっと大切なことを、私は今の家族から教えてもらいました。

みなさんもぜひ、家族と幸せに生活するためにどうしたらよいか考えてみてください。



この世の中で「家族がいることのありがたさ」を本当に理解し、家族と過ごせる時間を大切にできている人は、どれだけいるのでしょうか。

私が小学校3年生の時でした。父の脳に悪性の腫瘍が見つかり、入院しなければならなくなりました。父はシングルファーザーであったため、今までと同じ生活をする事ができなくなった私は、児童養護施設に入所することになりました。児童養護施設に入所した時期と新型コロナウイルスが流行した時期が重なり、入院中の父とは、会って話すことがほとんどできませんでした。そして、そのまま父は亡くなりました。

児童養護施設は、何らかの事情で親と暮らせない子どもたちが暮らす場所です。

学校へ行くと、「お父さんにこれ買ってもらった。」という声や、「今日お母さんに送ってもらった。」などという声が聞こえてきます。それを聞いて私はいつも、羨ましいなと思います。ある時には、「お母さんとケンカした。まじうざい。」などという声も聞こえてきます。それでも、私は羨ましいなと思ってしまいます。なぜなら、親と暮らしていなければ、そもそも顔を合わせて話すことさえもできないからです。

父が亡くなって、児童養護施設に入所して、やっと私は、「家族がいることは当たり前」ではなく、「家族がいることはありがたい」ということに気づき、理解することができました。

父が亡くなってから、今でも、すごく後悔していることがあります。

それは、「家族と過ごせる時間」を大切にできなかったことです。その年、私は、「今年のお父さんの誕生日にはケーキを買って喜ばせよう」と思っていました。けれど、父の誕生日当日。私は、ゲームがしたいという理由から、「ケーキは来年でもいいでしょ」と思ってしまい、ケーキを買いませんでした。お父さんには「来年はケーキを絶対買うね」という約束だけをして、何もせずに終わってしまいました。

けれども、父にとっては、それが最後の誕生日でした。「来年の誕生日にはケーキを買う」と約束し

てから1年もたたないうちに、父は亡くなってしまいました。私はその約束を守ることができませんでした。

なぜあのとき家族と過ごせる時間を大切にできなかったのか…父の誕生日がくるたびに考えてしまいます。この後悔を忘れることは、きっとないと思います。

この後悔から私は、「家族と過ごせる時間の大切さ」を知ることができ、それからは、親戚や友達などと過ごす時間を大切にしようと思えるようになりました。

しかし、「家族がいることのありがたさ」を本当に理解し、「家族と過ごせる時間」を大切にできている人はあまり多くないと思います。

私はある一人の友達に「児童養護施設って漫画とかアニメの世界みたいでかっこいい、楽しそう」と言われたことがあります。私はなんともいえない気持ちになりました。深く考えずに言葉にしたのか、家族のありがたさに気づけていないからなのかはわかりません。確かに施設の職員のみなさんは優しい方ばかりです。家族のように接してくださる方もいます。けれども本当の家族ではありません。私は、家族がいることはそれ以上ないくらい幸せなことだと思います。簡単に児童養護施設は楽しそうだなんて言わずに、家族を大切に、家族と過ごせる時間を楽しんでほしいです。

「家族がいること」は「当たり前」ではなく、「ありがたい」ことです。「家族と過ごせる時間」は「無限」ではなく「有限」です。「今度」や「次」はないかもしれないし、過ぎ去った時間は二度と戻りません。過去に戻ることもできません。今は「大丈夫」だと思っても、きっと後悔する時がやってきます。

だから私は、後悔のない人生を送るために「家族がいることのありがたさ」を本当に理解し、「家族と過ごせるかけがえのない時間」を大切にできる人が今よりもっともっと増えてくれることを願っています。



もし、当たり前のように一緒に暮らしている家族が突然いなくなったら。どんなことを思いますか。どんなことを考えますか。

2025年5月8日、僕の父親が亡くなりました。虫垂がんという、大腸の先端にある虫垂のがんでした。

去年の2月に見つかり、そのころにはステージ4でした。手術を行い、取り除いたものの、肝臓に転移していたことがわかりました。それから、抗がん剤治療を頑張っていたのですが、亡くなってしまいました。父が亡くなる1週間前、一時的に退院することができました。朝、学校へ向かって家を出ようとすると、父に手を握られながら「がんばれよ。」と言われました。この言葉が今でも忘れることができません。

僕は、父が亡くなってから1週間のうちは、自分の父親が亡くなったということを実感することができなかったのですが、2週間、3週間と日を追うごとに、自分の父親がいなくなったことへの悲しみや寂しさが込み上げてきました。

今、僕の話聞いている皆さん一人一人に家族がいると思います。それは当たり前のことです。僕も、ずっと家族と一緒にいることが当たり前のことだと思って生活をしていました。しかし、突然、父親が亡くなりました。

初めは、父の死を受け入れられずにいましたが、亡くなった父親の顔を見て、とてもつらくなり、学校を休むことが増えてしまいました。

この経験を通して、家族みんなと一緒にいることは決して当たり前のことではないということを思い知らされました。

僕は、父の死と向き合ったときに、後悔をしました。「もっとしゃべっておけばよかった。」「もっと一緒にご飯を食べたかった。」「一緒にもっとキャッチボールをしたかった。」など、数えきれないほどの後悔があります。

みなさんも僕も、父親と一緒にいることが当たり前だと考えていると思います。また、この中には、

反抗期で親や家族に不満を感じたり、反発をしたりしている人もいます。親や家族をうっとおしく感じて、言ってはいけないような暴言を言ってしまう人もいるのではないのでしょうか。僕もそうでした。ですが、もし、実際に親や家族がいなくなったら。きっと僕と同じように後悔をする人が多いと思います。

父からの「がんばれよ。」という言葉と手の力に、いろんな思いがこめられていたのかなと思います。父は余命宣告を受けていたので、もう長くないことは分かっていました。「勉強しっかりしろよ。」「野球がんばれよ。」「これからの生活まかせたぞ。」など、多くの思いが込められた言葉と温かい手ででした。そのなかでも、僕は「家族を任せたぞ。」というメッセージを強く感じました。父としては、母と反抗期の息子、2人だけを残してしまうことは大きな心残りだったのだと思います。だからこそ、反抗期の息子に「家族を任せたぞ。」という思いを込めた「がんばれよ。」という言葉を残したのだと思います。僕は父から大切にされていたんだと感じました。

父が亡くなったときは、僕も母も下を向いてばかりいました。ですが、たくさんの人に励まされ、応援され、今、こうして前を向いて生きることができるようになりました。父を大切にできずに後悔した分、この世にいるたった一人の親である母を大切にします。

この先、僕たち家族には、高い壁が待っているかもしれません。どんなに高い壁でも、僕と母、そして目には見えないけれどそばにいてくれる父と三人四脚で乗り越えていきます。





私は音楽を聴くことが好きです。吹奏楽部に所属しています。最近、私の印象に強く残った、とある学校の演奏がありました。最後の一音とともに会場が割れんばかりの拍手に包まれたとき、私は自分が瞬きも忘れて聞き入っていたことに気が付きました。演奏を聴いた後、友達と感想を語りあったのですが、私の口からは「やばい」「すごい」といった言葉しか咄嗟に出てきませんでした。それに私はどこか引っかかりを覚えていました。私が感じた、あの、「やばい」では言い表せないほどの心が震えるような感動が、どこかへ消えてしまっているような気がしていたのです。「やばい」のような万能で、けれども曖昧な言葉が私たちの会話には溢れています。しかし私たちは、それによって何か大切なものを失ってはいないでしょうか。

私はどうして、いつも「やばい」「すごい」ばかり使ってしまうのだろう、と考えてみました。私が考えた答えは、ズバリ、「楽だから」です。自分が感じた複雑な気持ちにぴったりの言葉は、そう簡単に見つかりません。みんながよく使う、便利な言葉につい頼ってしまいます。しかし、そんな自分で吟味せず選んだ言葉に、果たしてどれほどの価値があるのでしょうか。私はこれを、多くの人、何より自分の気持ちと向き合おうとしなかった自分自身に問いかけたいです。たとえ難しくても、自分の素直な気持ちを見つめて出る言葉にこそ、本当に価値があると思うのです。

心理学ではこんなことが言われています。言葉で感情を表現することで、その感情に変わったり、その感情が強まったりする、ということです。例えば「ムカつく」と言えば実際に腹が立ち、「楽しい」と言えば本当に楽しくなります。言葉と感情は深く結びついているのです。だからこそ、「やばい」で表された感情には、「やばい」という曖昧なレッテルが貼られ、本当に価値のある部分が見えなくなって

しまいます。言葉は、ただの文字列や音ではありません。「言葉は心を映す鏡である」という言葉がありますが、まさに、言葉は自分に見える世界の奥行きを決めるものなのです。

そこで私は、「やばい」や「すごい」の裏に隠れた本当の気持ちを見つめていきたいと思います。そして「どんな言葉を使えば、この気持ちが言い表せるだろう」と、自分に問いかけていきたいと思います。私は今、心動かされるものに出会ったとき、感情を言葉で表すことを意識しています。そのためにも、好きな詩や小説からお気に入りの表現を探したり、随筆や和歌の美しい大和言葉に触れたりして、言葉のストックを増やそうと努力しています。

そんな風に言葉を豊かにしていけば、私があの演奏会の後に上手く言葉にできなかった感動が、次は友達に伝えられるかもしれません。感動の輪を広げていけるかもしれません。

最後に、私たち一人一人に見えている世界は、唯一無二のものです。他の人に見えている世界は決して見ることはできません。しかし、言葉を使えば世界を共有することができます。あなたが感動した映画。きれいだと感じた風景。あなただけが持つ感性を、あなただけに見える世界を、まずはあなたの目でしっかりと見つめてみませんか。そしてその世界を、豊かな言葉で周りに広げていきませんか。私はこれから自分だけの感性を大切に、丁寧に、そして正直に言葉を選んでいきます。それが、自分の世界を広げ、誰かと通じ合うことができる道だと信じているからです。

## 「わたしたち」を言葉にしよう

金沢市立西南部中学校 3年 森田 知音



「ヤバい」「エグい」という言葉を、皆さんも使ったことがあるでしょう。まずい、危ないというマイナスなことを表現するときも、反対に、すごい、素晴らしいなどプラスなことのときも、同じ3文字で済む。すごく使いやすい言葉ですよ。また、「エモい」という形容詞。感動、胸を打つ、心が揺さぶられる、感傷的になる、切ない、懐かしい、痛切な気持ちになる、挙げたらキリがないほどの様々な感情が、この言葉一つにまとまっています。「わかる!」「それな」も、私達若者の間では、同意を示す言葉の定番となっています。

本当に、これで良いのでしょうか。私が今抱いているのは、「ヤバい」なんてたった3文字で表せるほどのチープな感情じゃない。もっと複雑で、色鮮やかで、この気持ち一つで原稿用紙何枚だって埋められるような、そんなものではなかったか。友達の話に「わかるわかる」と返した私は一体何をわかっているのか。

日々、私達は素晴らしい体験をさせてもらっています。その素晴らしい体験を、わずか一言で消費してしまう毎日に、なんて勿体ないことをしてきたんだ、と気づいたのはごく最近のことでした。

友人と映画を見に行った、その後のことです。時間が経ってなお冷めやらぬ感動を母に伝えるべく、ただいまの挨拶もそこそこに口を開きます。「主人公とその友達が最後にハグをするシーン、めっちゃ感動した!泣いた!」そのようなことをたくさん喋りました。たくさんたくさん喋って、やっと口を閉じたとき、自分が何も伝えられていないことに気が付きました。感動した、面白かったのはわかった。では私はなぜ感動したのか。ただ抱き合っただけでは泣いてしまうほどに心が動くはずがありません。抱き合うに至るまでに登場人物たちは多くの苦難を乗り越えた。私はそこに、過去の経験を重ねて泣いたはずなのです。深く感動するまでの道のり、その肝心な部分を私自身が認識できないままに終わらせていることを自覚して初めて、“言語化をサボっている状況”に、危機感を覚えました。

私が今回皆さんに話したいのは、言語化の重要性、そのメリットです。

まず一つ目は、他者と心の深い部分で、体験を分

かち合うことができるという点です。体験や思いを分かち合いたい、そういった欲求が私達人間にはあります。身の回りに起きた面白い出来事を話して、一緒に笑いたい。誕生日プレゼントをもらって、心の底から湧き上がる感謝を相手に伝えたい。自分のストーリーを、できる限り詳しく、時には面白おかしく工夫して相手に渡すことが、言葉ならできます。

二つ目は、問題解決の手助けになる点です。かつて、私は所属する剣道部の仲間と意見が擦れ違ってしまったことがありました。何が悪かったのか、誰が悪かったのかと悶々と思い悩んだとき、あったこと、考えたことを日記として書いてみることにしました。自分の状況に適した言葉を当てはめていくうちに、私達が置かれていた状況が見えてきます。自分や他者の言動を少し引いて見るのが可能になる、そこが肝心なんです。彼女の発言はこういう意味だと思い込んでいたけれど、実は違っていたんじゃないか。自分の視点では分からなかったことが分かるようになるんです。

三つ目として、気持ちを整理できることも挙げられます。ぐるぐるとエンドレスに回っていた思考が、書くことで目に見えたとすっきりします。足元の見えない暗闇は怖い、見える昼間は怖くないのと同じです。もうすでに歩いた部分を繰り返さないぞってしまうこともなくなります。

また、書いたり話したりしていると、思いがけない言葉が出てくることがあります。自分のひらめきやふいに口をついた言葉。予想もしていなかった言葉と言葉のつながりが、新しい経験や人との結びつきを強くしてくれます。これが四つ目のメリットです。

このように、言語化というのは自分の感情を共有したり、課題を解決したり、気持ちを整理すること、新しいつながりを生み出すこともできます。言葉にすることは簡単ではないかもしれませんが、ですが、難しい言葉を使おうとムキになる必要はありません、まずは私たち自身の言葉で「わたしたち」を言語化してみませんか?きっと新たな感情、自分に出会えるはずです。

これで、私からのメッセージを終わります。ご清聴ありがとうございました。



私の家では、お母さんのことを「オンマ」と呼び、お父さんのことを「アボジ」と呼びます。これを聞いて、変だと感じた人がほとんどでしょう。ですが、母が韓国人の私にとっては当たり前のことで、小さい頃から言っていた、ごく自然な言葉なのです。

小学2年生のとき、家族で大阪へ出かけました。そのとき街の中で、「オンマ！こっちだよ！」と私が叫びました。すると、周りにいた人たちが、不思議そうにこちらを見てきたのです。私は悟りました。「これはみんなと違うことなんだ、おかしいことなんだ。」そんな出来事があってから、「オンマ」と言いかけて、「お母さん」と言い直すたび、後ろめたさや疎外感を感じていました。学校でも自分がハーフであることを明かすことが、少なくなりました。それは、中学校に上がっても変わらず、新しくできた友達や仲の良い先輩にも話していませんでした。

中学1年の夏休み、母の実家に用事があったため、韓国へ出かけることになりました。韓国に着くと、母はとても生き生きとして、楽しそうでした。そのときの私には、「お母さんは、日本より母国である韓国にいたいのかな……」「日本のことは、好きじゃないのかも……」そう見えて、不安になりました。

しかし、私の母は日本人と遜色のないくらい、日本語が上手です。焼き魚やみそ汁などの日本食を、とても美味しく食べてます。日常生活でも、国内旅行でも、道路に落ちているゴミの少なさに、感心しています。私はそんな母のどこが日本を嫌っているように見えたのでしょうか。むしろ、日本の文化を受け入れ、尊重しているように感じます。

私は韓国が大好きです。本場のチヂミやビビンバは本当に美味しいですし、ファッションもユニークなものが多く、とても魅力的な文化ばかりだからです。だから、「オンマ」という言葉にも、「お母さん」

という言葉にも、違和感がありません。それは、私が韓国の文化も日本の文化も知ることができる、体験することができる環境だったからだと思います。

つまり、変だと感じてしまうのは、その国の人々や文化を知らないからではないでしょうか。また、自分にはどうせ関係のないものだからと、知る機会を逃しているからではないでしょうか。

私は母が韓国人であること、自分自身がハーフであることを悔やんだことはありません。ですが、「生きにくい」と感じることはあります。みなさんはどう思いますか。自分の考えや行動を否定されるのではないかと、恐れることはありませんか。だからこそ、誰もがそれぞれの考え、文化を尊重し合い、どんなところへ行っても自分を出せる世の中にしたいのです。

このような世の中を実現させるには、さまざまな国の文化を自分から知ること、そして、伝えることが必要です。現代の社会は、グローバル化が急速に進み、世界のありとあらゆる情報が飛び交っています。知ることはもちろん、発信することだって簡単にできてしまうのです。それを踏まえると、誰もが尊重し合える世の中は、実現可能なのです。

私はハーフだからこそ知ることができた日本と韓国のよさを、たくさんの国に伝えたい。他の国にも行き、私の知らない文化を体験してみたい。多くの国と関わりたいのです。みなさんも、日本だけでなく、世界を知り、世界と関わってみてください。誰がどこへ行っても、自由に過ごせる世の中にするために。

## 審査委員講評

石川県教育委員会事務局学校指導課 課参事 廣澤 健吾



本日、少年の主張石川県大会において、素晴らしい主張をしてくれた十六名の皆さん、どの発表者も中学生らしく、さわやかな語りの中に、自分の熱い思いを込め、その思いを豊かに表現していました。

自分のことを振り返ると、反省点が出てくるかと思いますが、皆さんとても素敵な発表でした。一人一人が自分自身の経験を通して感じたことやその経験の中で見つけた問題をどのように解決していくかなどについて堂々と発表する姿にとっても感動しました。このような素晴らしい大会に参加できたことを大変うれしく思っております。本当にありがとうございます。また、ご臨席の保護者の皆様、引率の先生方におかれましては、ぜひ子供たちの頑張りを褒めてあげていただきたいと思います。

さて、これからの社会、皆さんが大人になって生活していく社会は、深刻さを増す少子高齢化や混迷の度を増すグローバル情勢に加えて、気候変動に伴う自然災害の激甚化や生成AIなどデジタル技術の発展といった大きな変化があいまって、先行きに対する不確実性がこれまでになく高まっています。

これからの社会の担い手として生きる皆さんには、生涯にわたって主体的に学び続け、自らの人生を舵取りする力を身に付けるとともに、異なる価値観を持つ多様な他者と、当事者意識を持って対話を行い、問題を発見・解決できる、「持続可能な社会の創り手」となるための力を身に付けることが求められています。

こう聞くと、非常に難しいことのように感じるかもしれませんが、大切なことは、自分が気になることや関心のあること、実現したいことなどについて、課題意識をもち、その課題に対してどのような解決方法があるかを見通し、必要な情報の収集・整理・分析を通して、自分なりの最適解を見つけるこ

とです。そして、自分の思いを言葉としてしっかり伝えることです。本大会で皆さんが示してくれた課題に取り組む意識とその解決に向けて思考する力、整理・分析した情報を根拠とし、自分の思いをしっかりと伝える力などが、まさにこれからの社会に必要な力だと思います。

自己の生き方を考え、主体的な判断の下に行動し、自立した一人の人間として他者と共によりよく生きるために自分ができること、自分がすべきことを常に意識し、これからも大きく成長してほしいと思います。

結びに、子供たちにこのような成長の場を与えていただいた関係者の皆様、また本日まで丁寧にご指導いただいた先生方、そしていつでもそばで見守り、支えてくれる保護者の皆様に感謝を申し上げるとともに、このような素晴らしい会に参加させていただいたことにも感謝を申し上げ、私の講評とさせていただきます。





## 令和7年度 少年の主張石川県大会概要

### 1 趣 旨

中学生が、日常生活での体験や考えを自分自身の言葉でまとめ、それを広く発表する機会を提供することにより、中学生世代における社会参加意識の醸成を図るとともに、多くの大人に現代の中学生への理解を深めてもらう。

### 2 主 催

石川県 石川県教育委員会 石川県健民運動推進本部  
独立行政法人国立青少年教育振興機構

### 3 後 援

石川県市町教育委員会連合会 石川県小中学校長会  
石川県PTA連合会 石川県子ども会連合会  
明るい社会づくり運動いしかわ 石川県青少年育成アドバイザー協会  
石川県BBS連盟

### 4 日 時

令和7年8月31日（日）午後1時30分～

### 5 会 場

石川県青少年総合研修センター（金沢市常盤町 212-1 TEL 076-252-0666）

### 6 出場資格

県大会へ出場する生徒は各地区大会で選出された生徒とし、在籍中学校長へは健民運動推進本部より県大会参加通知をする。

### 7 発表内容

次に掲げる事項の中で、心からの思い、考えたことや感銘を受けたことなどを、少年らしい自由でユニークに、飾り気のない言葉でまとめたもの。

ア 社会や世界に向けての意見、未来への希望や提案など

イ 家庭、学校生活、社会（地域活動）及び身の回りや友達との関わりなど

ウ テレビや新聞などで報道されている少年の問題行動、大人や社会の様々な出来事に対する意見や感想、提言など

### 8 表 彰

最優秀賞（石川県知事賞） 1名  
優 秀 賞（石川県教育委員会賞） 2名  
奨 励 賞（石川県健民運動推進本部長賞） 13名

### 9 その他

- （1）発表内容は、記録集として発表者、中学校長、青少年団体等へ配付する。また、広く同世代の少年及び世代を越えた人々の意識を啓発するために、健民運動推進本部のホームページにも掲載する。
- （2）最優秀賞受賞生徒は、独立行政法人国立青少年教育振興機構が11月に開催する「少年の主張全国大会」出場者選考のための全国大会代表審査委員会へ推薦される。

## 県大会審査基準

### 1 採点方法

100点満点とし、各項目の配点は次のとおりとする。

- (1) 論旨・内容 60点
- (2) 表現力 30点
- (3) 態度 10点

### 2 採点上の観点

#### (1) 論旨・内容について

- ア 鋭い感性で、新鮮な主張であるか（中学生らしさ）
- イ 新しい情報や視点があるか
- ウ 個人の体験にとどまらず、一般性・社会性があるか
- エ 提案や提言を実現・実践する意欲が感じられるか
- オ 論旨が一貫し、構成がしっかりしているか

#### (2) 表現力について

- ア 聞きやすく、説得力のある話だったか
- イ 話しぶりに熱意と迫力があつたか
- ウ 聴衆に共感と感動を与えていたか

#### (3) 態度について

- ア 中学生らしく、さわやかで落ち着いた態度であつたか

### 3 時間超過の場合の減点

各発表者の持ち時間を5分とし、持ち時間を超過した場合はその時間の長さに応じて各審査委員の点数から減点する。（5分30秒以内は減点しない。5分30秒を超え6分以内は1点、6分を超えると2点の減点をする。）

## 審 査 委 員

(1) 審査委員長 清水 茂 (石川県市町教育委員会連合会 副会長)

(2) 審査委員 河本 隆明 (石川県小中学校長会 理事)

矢花 ルミ (石川県PTA連合会 副会長)

中黒 公彦 (石川県青少年育成推進指導員連絡会 会長)

縄 寛敏 (石川県子ども会連合会 会長)

廣澤 健吾 (石川県教育委員会事務局学校指導課 課参事)

## 地区大会概要

(1) 加賀地区大会(加賀市、小松市、能美市、能美郡川北町)

「第44回 加賀地区中学生意見発表大会」(兼令和7年度少年の主張石川県加賀地区大会)

主 催 加賀地区市町教育委員会

共 催 石川県健民運動推進本部

日 時 令和7年8月2日(土) 13:00～

会 場 能美市根上総合文化会館 音楽ホール

審査員 二口英一郎 (石川県教育委員会事務局小松教育事務所長)

山本 民夫 (加南地区教育委員会連絡協議会長)

横関 達人 (能美市教育長)

西河 志津 (石川県教育委員会事務局小松教育事務所指導主事)

発表者(20名)

タイトル	中学校名	学年	氏名
デジタル時代に筆をとる	小松市立中海中学校	3	日置 心和
ひとことから生まれる笑顔	川北町立川北中学校	3	小川 瑠璃
「いく道」	加賀市立片山津中学校	3	岡本 彩花
「理想」への心がけ	小松市立芦城中学校	3	岩崎 悠
気にしすぎないこと	加賀市立錦城中学校	3	高橋 梨紗
私が本を読む理由	能美市立寺井中学校	3	池上 真央
言葉で心をみつめよう	小松市立松陽中学校	3	森井 琴子
言葉に責任を持つ	小松市立国府中学校	3	丑屋 椿生
才能に勝るもの	加賀市立山中中学校	2	竹永 滯
人間のイメージと差別	小松市立御幸中学校	3	武隈 寛人
あなたにとっての「平和」とは何ですか?	小松市立南部中学校	3	奥ノ矢 玲麻
まわりに頼ること	能美市立辰口中学校	3	川端 優月
学校の意味	小松市立板津中学校	3	南 桃加
塩むすび	加賀市立東和中学校	3	田中 悠太郎
未来につなげたい ー私を変えた子ども歌舞伎ー	小松市立丸内中学校	2	村井 美智乃
「罰があたる」	加賀市立片山津中学校	3	中野 暖
今日の選択未来の選択	小松市立安宅中学校	3	南 ましろ
「絆」とは何か	能美市立根上中学校	3	橋本 碧透
当たり前の温かさを大切に	加賀市立錦城中学校	3	芳原 梓月
世界で一番尊いものは	小松市立松東みどり学園	9	平道 由唯

(2) 石川中央地区大会（かほく市、白山市、野々市市、河北郡）

「第35回（令和7年度）少年の主張石川中央地区大会」

主 催 石川県 石川県健民運動推進本部

共 催 津幡町教育委員会 石川県青少年育成アドバイザー協会

日 時 令和7年7月27日（日）13：30～

会 場 津幡町文化会館シグナス 多目的室

審査委員 吉田 克也（津幡町教育委員会 教育長）

広橋 陵（河北郡市学校教育研究会 かほく市立宇ノ気中学校 教頭）

二ノ井伸夫（白山市PTA連合会 副会長）

輿石 奈央（石川県教育委員会金沢教育事務所 指導主事）

宮崎 禮子（石川県青少年育成アドバイザー協会 会長）

発表者（12名）

タイトル	中学校名	学年	氏名
「普通」って何？	白山市立北辰中学校	3	伊東 奏羽
大好きなお母さんにぶつけた思春期	白山市立北星中学校	3	今出 美來
誇りある自分へ	かほく市立高松中学校	3	兼島 秋香
自信を持つ	白山市立鳥越中学校	3	口田 梨琴
ヒーローに出会った冬	津幡町立津幡南中学校	3	倉知 ななみ
白山麓の活性化に向けて	白山市立白嶺中学校	3	合田 美琴
コンプレックス	白山市立北辰中学校	3	鶴田 羽絆
食べ物のありがたみ	白山市立笠間中学校	2	久安 楓美
「嫌われ役」を買いますか	野々市市立野々市中学校	3	山崎 美音
血よりも深い絆	白山市立鶴来中学校	3	山下 楓栂
時代を紡ぐ民謡の響き	かほく市立高松中学校	3	山本 日菜子
夢	内灘町立内灘中学校	3	綿谷 駿之介



(3) 金沢市地区大会（金沢市）

第78回金沢市「中学生からのメッセージ」発表会

主 催 金沢市教育委員会、金沢市中学校文化連盟弁論部

日 時 令和7年8月8日（金）13：00～

会 場 教育プラザ富樫 121・122 研修室

審査員 二見 和男（NHK金沢放送局キャスター）

金沢市内各中学校国語科教諭 等

発表者（24名）

タイトル	中学校名	学年	氏名
生きたいように生きなきゃ	金沢市立浅野川中学校	3	馬場 光冴希
無知は敵	金沢市立額中学校	3	小堺 百々花
私にとっての私とは	金沢市立高岡中学校	3	普神 舞美
海外の人への無意識な偏見	金沢市立港中学校	3	坂本 衣咲
相手のものさし	金沢市立森本中学校	3	安田 旺基
その「当たり前」は誰のもの？	金沢市立大徳中学校	3	芝田 怜加
「いじめ」と「いじり」	金沢市立緑中学校	3	池田 優奈
自信という友	県立金沢錦丘中学校	3	越野 愛梨
当たり前	金沢市立長町中学校	2	九尾 悠翔
「わたしたち」を言葉にしよう	金沢市立西南部中学校	3	森田 知音
今日も、空は青いのに	金沢市立金石中学校	3	橋爪 唯花
最後の約束	金沢市立野田中学校	3	田口 愛梨
人生における「成功」とは	金沢市立兼六中学校	3	元田 晃太郎
ナイフではなく、毛布に	金沢大学附属中学校	1	神渡 花奈
努力って報われるの？	金沢市立鳴和中学校	3	宇都宮 悠太郎
学びを止めるな！	金沢市立長田中学校	3	瀬川 栞奈
「きっかけ」と「夢」	金沢市立紫錦台中学校	3	野口 絢愛
過疎化が進む地域のために	金沢市立芝原中学校	3	村田 理紗
「自分」を伝える	金沢市立清泉中学校	3	鈴木 友絆
気づき・後悔・感謝	金沢市立城南中学校	3	任田 陸人
自分で作った壁	金沢市立泉中学校	3	鈴木 蛍
反抗期ってほんとうに悪いこと？	金沢市立北鳴中学校	3	春木 美怜
いじめは消えない	金沢市立犀生中学校	3	五十島 健
図書館で本を借りよう	金沢市立医王山中学校	3	林 紗綾

(4) 能登地区大会（七尾市、羽咋市、輪島市、珠洲市、羽咋郡、鹿島郡、鳳珠郡）

「第57回少年の主張能登地区大会」

主 催 第57回少年の主張能登地区大会実行委員会、七尾市教育委員会  
 共 催 石川県健民運動推進本部  
 日 時 令和7年8月5日（火） 13：30～  
 会 場 七尾市文化ホール 大ホール  
 審査委員 松浦 顕雄（全国高等学校文化連盟弁論部常任理事）  
 石井 優子（石川県教育委員会事務局中能登教育事務所指導課長）  
 湊口登志子（七尾市中学校文化連盟会長）  
 布川かほる（七尾市学校教育研究会 国語科教育研究会会長）  
 水谷内良郎（中能登町立中能登中学校長）  
 川口 真裕（七尾市教育委員会学校教育課長）

発表者（11名）

タイトル	中学校名	学年	氏名
「エレガント」を届けたい	輪島市立門前中学校	2	小松 奈緒美
かけがえのないもの	輪島市立東陽中学校	2	細谷 瑞羽
自分の気持ちを届けるには	七尾市立七尾東部中学校	3	松山 愛奈
あなたのその一言で	七尾市立七尾中学校	1	稲田 優仁
未来への備え	七尾市立能登香島中学校	3	石坂 糸
勇気を出したその先にあるものは	七尾市立中島中学校	3	加賀 理暖
世界を知って、世界と関わる	中能登町立中能登中学校	3	久井 侑七
AI とのつきあい方	七尾市立七尾東部中学校	3	峪 美陽
人生と向き合って	中能登町立中能登中学校	3	瀧口 蒼太
伝えたいこと	七尾市立七尾中学校	3	野村 虎
努力の天才	七尾市立中島中学校	3	菊澤 光

## 伝える

鳥取県 鳥取市立桜ヶ丘中学校 3年 谷口 鉄馬

手を挙げた瞬間、みんなの息を吸う音が聞こえる。そして合唱が始まる。穏やかに始まった合唱が坂を登るように盛り上がっていく。僕はどんなふうに歌ってほしいかを、手で、そして全身で表現する。音楽が弾ける。僕が好きな瞬間のひとつだ。

僕は中学校で、合唱コンクールの指揮者を三度務めた。今年の曲は「心の瞳」。練習はまだ始まったばかりだ。

僕が指揮をするのは、口唇口蓋裂という病気の影響がある。僕の唇では、歌う時に上手に発音をすることができないが、指揮者なら、みんなの役に立つことができるからだ。

僕は生まれた時、唇と上の顎が裂けていた。このままでは、母親の乳を吸うことができずに死んでしまう。成長しても唇の隙間から息が漏れてうまく話すことができない。僕は、生まれてすぐに手術を行った。

顎と唇の隙間は一応塞がったものの、鳥取の病院では、それ以上の対応はできなかった。両親が必死になって探した岡山の病院で、赤ちゃんの僕はまた手術を受けた。手術を何度も繰り返し、何年も通院を繰り返した。今でも年に一度、岡山に通っている。そのおかげで、今では食事を取ることもできるし、会話することもできるようになっている。

しかし、人と話す時に心に引っ掛かりがあるのも事実だ。発音がしにくいので、僕の言葉がどう受け止められているのか、相手の表情を気にしながら話すこともある。実際、何度も聞き返されることや、発音のことをからかわれることがあった。何度も聞き返される時は、相手に対して申し訳ない気持ちになる。からかわれた時は、馬鹿にされたことに苛立ちを覚える。何を言っても無駄だと感じて諦めるときがある。

小さい頃、口元にマスクをつけた僕のことを、見知らぬ女性が「かわいいねえ」と言った。しかし、マスクをとった僕の口元を見た女性は、僕のことを「かわいそうな子」と言ったそうだ。「かわいい」と「かわいそう」。わずかな違いかもしれない。けれど母にとっては大きな違いだった。「かわいそう」という言葉に、「不幸な子」という意味を感じたのか

もしれない。母は「鉄馬は可哀想な子じゃない！」と強く言い返したという。

そんな母も、「こんな体で産んでしまっでごめんね」と口にしたことがある。そのとき僕は「気にしてないし、大丈夫だで」としか返せなかったけれど、両親にとっても感謝しているのだ。この病気を治してくれるためにたくさんのことをしてもらった。歯の矯正をするにも、僕の場合は特別な処置が必要なので、岡山の歯科医に毎月通わせてもらっている。ほとんどの場合、父が送迎してくれる。こんなふうにお金も、時間も、愛情もたくさんかけてくれた。僕の唇は、その証だから。

そんな僕が、中学一年生で合唱の指揮者になった。未経験のこの役割に強くひかれ、すぐ立候補した。実際にやってみると、どうやったら歌い手に的確に伝わるか、手で伝える面白さを知った。自分なりに指揮をアレンジして、どの部分をどう歌ってほしいのか、楽しみながら伝えることで、今までにない達成感を得られた。正しい発音は一つだけど、人を感動させる音楽は無限にある。僕は、僕の指揮でそれを表現できることに、言いようのない喜びを覚えた。指揮することで表現できる世界の広さは、僕が歌うことで表現できる世界を大きく飛び越えていった。

口唇口蓋裂の子供たちは、話すこと、表現することを躊躇しがちだ。でも、自分のことを伝えたい、表現したいと強く思っている。諦めずに伝えてほしい。言葉でも、それ以外でも、自分を表現する方法は、きっとある。伝えたい思いを受け止めあえたら、病気や障害、色々な違いにかかわらず、お互いの世界はもっと広がるはずだ。

今年の合唱曲「心の瞳」はこう始まる。「心の瞳で君を見つめれば、愛すること、それがどんなことだか、分かりかけてきた」

言葉で言えない胸の暖かさを、見つめ合うことで伝えるという詩だ。

伝わる。きっと伝わる。だから伝えることを諦めないでほしい。言葉でも、音楽でも、見つめ合うことでも、自分らしいやり方が、きっとあるはずだ。



毎月第3日曜日は「家庭の日」です  
家族とのふれあいを大切にしましょう

## 石川県健民運動推進本部

〒920-8580 石川県金沢市鞍月1丁目1番地

石川県生活環境部女性活躍・県民協働課内

TEL 076-225-1366 FAX 076-225-1374

ホームページ 【健民運動】 で検索

メール [kouryu@pref.ishikawa.lg.jp](mailto:kouryu@pref.ishikawa.lg.jp)